

「お……になる」考

辻 村 敏 樹

序

今日の標準語においては相手の動作を敬っていふ場合、所謂「お……になる」の形式をとって、「讀む」に對して「お讀みになる」、「書く」に對して「お書きになる」等といふのが普通である。そして、これは他の時代に對し當代を特色づける一つの表現形式である。言ひかへれば、今日は敬語の面からすれば、まさに「お……になる」の時代と銘打ってもよいほどなのである。(もととも漢語の場合は「ご……になる」となるのが普通であるが、これは性質から云って全く同じものなので以下特に斷らない限り「お……になる」を以て代表させることとする。)

ところが、この形式はいかにして成立し、又いつ頃から用ゐられるやうになったのか、して又それが一般的になった時期はいつ頃なのか、かういふ問題については從來餘りふれられて居ないやうである。そこで私は以下にこの形式の沿革を尋ね、その様相を明らかにして見たいと思ふ。

右に述べたやうな次第で、特にこの問題を取りあげた論文を私は殆ど見出さないものであるが、今泉忠義博士の「國語發達史大要」には次のやうな記載が見える。

「お……になる」が著しく發達したのは江戸末期からであるがその萌芽は既にこの期(筆者云、鎌倉時代)に見える。

胸打騒テ居タル處ニ御・ヒル・ニ成ケレバ、例ノ先朝政ニモ及給ワス夜ノヲト、ヲ出テモアヘサセ給ハス(延慶本平家、三本)右の「御・ヒル・ニ成」といふ語法から、朝起きることを「ひる」と言ふことがあつただらうと想像せられる。そして夜寝ることは「よる」であつただらう。

月をも御覽ぜでおよるなれば(古今著聞集)

がそれである。平安朝では動詞に「御」を附けることは極めて稀であつたらしいが、この時代になつて右の様な言ひ方のあることは注意すべきであらう。「ひる」も「よる」ももと名詞で

ある爲に「お」が附き易かつたことに起因するのであらうか。

(同書一九八・一九九頁)

「お……になる」の言ひ方は前代にはありながら當代（筆者云室町時代）では未だ現れない。（同書二六〇頁）

即ち、氏によれば「お……になる」形式は、遠く鎌倉時代に發し、江戸末期に至って盛んになったといふことになる。

ところで、氏の擧げられた延慶本平家の例は夙に山田孝雄博士も「平家物語の語法」の中に引用注目して居られるものであり。それは、まさしく氏の言はれる通り、今日の「お……になる」形式の萌芽と見做すべきものであらう。併し、問題は次にある。即ち、萌芽はどこ迄も萌芽であつてそれ以上のものではなく、今日のものとは決して同一視できないものだといふことである。

今日の形式では「お」と「になる」との間に挟まれるものは動詞の連用形である。（但し、漢語の場合は別である。もつとも、この場合は接頭辭も「御」であるのが普通だが）然るに右の延慶本平家の例では「ひる」といふ純粹の名詞になつて居る。この點が根本的に違ふのである。もつとも今泉博士はこれを動詞と見られたやうで、右の例から朝起きることを「ひる」と言ふことがあつたらうと想像して居られるが、もし、「ひる」といふ動詞があると想定した場合、この形は當然終止形か連體形としか考へられない。然るに「お」と「になる」とが、終止や連體を挟んだといふ例を私は知らないのである。而もこの場合「御ヒル」の「御」が「お」と讀まれるべきものかどうかも頗る疑はしい。むしろ時代からいってこれは恐らく「おん」と讀むべきものと思はれる。

「おん」から「お」への推移については、「敬語接頭辭『お』について」と題する筆者の論文（雜誌「日本の言葉」第四五七號（昭和二十二年九月・十月及二十三年九月號）掲載）を参照していただきたい。だとすれば、右の例は今日の「お……になる」から一層遠いものになる。實際この形式が固定するに至つたのは、何といつても「お」が一般的になつてからと考へられ、従つて「おん讀みになる」「おん書きになる」といふやうな言ひ方は恐らく事實上存しなかつたものと思はれる。

更に、前記著聞集の例から直ちに動詞「よる」の存在を想定し得るかどうかといふことにも疑ひは存する。何となれば諸本何れも「御よるなれば」とあり、その「御」字が前と同じく「おん」と讀まれるべきだとすれば、これはむしろ「御幸なる」等の「御……なる」形式に準ずるものと思はれるからである。

つまり、「御よる」は「御夜」で「寝ること」を婉曲に表した敬語名詞なのであり、それに「なる」がついて「おやすみになる」といふ意を表して居るものではないかと思はれるのである。（中務内侍日記「いまた御所は御よるのほとにすへりて」（類従本九〇）参照）これは前記「御ひるになる」の言ひ方についても言へるので、その場合の「御ひる」はやはり「起きること」を敬つて言つた言葉と考へられる。そして、後に「およる」といふ動詞ができたのは、「よる」に「お」がついたのではなく、名詞「およる」（最初は「おんよる」）の形がたまたま行四段活用の終止連體形と同形である爲、それがそのまま活かされるに至つたものと思はれる。ただ、「およる」だけが動詞として一般に用ゐられる

やうになつて、「おひる」の方がさうならなかつたのは、前者に對しては「物によりかかる」とか「床による」とかいふやうに寝ることと意味的聯想を有する言葉が一方にあるのに對し、後者には「潮がひる」とか「鼻をひる」とかいふやうに全く縁のない言葉しなかつた爲ではなからうか。(もつとも、大日本國語辭典には、四段活用自動詞「おひる」の例として、中務内侍日記から「かくまで御所に御人ずくななりつれば、御ひるよりさきにと、いそぎ參りたれば」といふ文がひいてあるが、この「御ひる」は名詞とも見られるものである。また、たとへ勅詞であつたにせよそれが一般化しなかつたことは他に用例らしい用例を見ないことからも言へよう)

論はやや横道に入つたが、これを要するに、延慶本平家の例は「お……になる」形式の沿革を考へる上に大切なものではあるが、今日のものと直結するには遠く、ただその母胎とも萌芽とも見られるといふ點において注意せられるべきものである。

なほ、この様な例は、

夜も更けしかは御所も御よるにならせおはしましたりしか〔辨内侍日記、上、一二ウ、群書類從本〕

御所もいまた御夜にもならせおはしまさず御手習なとありて

〔同右、四一ウ〕

等、鎌倉時代のもの、中でも、宮廷關係のものにはかなり多く見られるやうである。

それならば、「お……になる」形式の今日と同じく扱へるものはいつ頃から見られるであらうか。

今泉博士の前記「國語發達史大要」に従へば江戸末期といふことになりさうであるが、氏はまた、

「お……になる」の形式は江戸時代までは溯れないで、明治の初め頃でもう見つからなくなつてしまふ。〔國語教育學會叢書第二輯、現代語法の諸相、一三一頁〕

前述のやうに「お……になる」は明治以後に現れたのであらう。〔同右、一五〇頁〕

等と記して居られるので、これによるなら、明治初期以前には溯れないことになる。但し、これについて氏は具體的に實例を示しては居られない。

ところが、湯澤幸吉郎氏の「室町時代の言語研究」には、次のやうな一節が見られるのである。

◎和泉流の狂言老武者等にある「何ト思フテ御出デニ成ツタ」の如き「オ……ニナル」は、現在の東京言葉には盛に用いられるが、抄物には今までの所、發見し得ない。蒙求抄に

○其ノアネノ子夫ハ美人テ武帝ノ祕サウニナルツヘハ、ニウの例はあるが、これは「武帝ノ祕藏ニナル」と解すべきである。

即ち武帝の次にある「ノ」は、主語につく「ノ」ではなくて、いわゆる所有格を表す助詞と見るべきであるから、随つて「ニナル」は敬語とは見られないのである。(同書、一四〇頁)

即ち、氏は抄物に「お……になる」形式のないことを明らかにせられたのであり、その意味において氏の説明は穩當なものと思は

れる。併し、ここで私の注意をひくのは右に擧げられた狂言記の例である。

即ち、今この例をそのまま認めると「お……になる」形式は早くも室町時代の口語に使はれてゐたことになるのである。

併しながらこの例は當時として極めて唐突なものに思はれ、事實、抄物については湯澤氏の言はれる如くであり、狂言記にもまた他に例を見ないやうである。今泉博士が、『お……になる』の言ひ方は前代にはありながら當代ではまだ現れない。(國語發達史大要、一六〇頁)と言はれたのもこの間の事情を指して居られるものと思はれる。

而も、「何と申うて」といふ言ひ方は明らかに關西的表現であり、當時の京都言葉を書したと思はれる狂言記に見えることに何等不思議がないのに反し、「お出でになった」の方は、全く今日の標準語と同じである。もしこのやうな言ひ方が古くから行はれて居たのなら、今日どこかの方言に残つてゐて然るべきなのに、東京を除けば關西はもとより全國にその例あるを聞かない。(標準語が入りこんで用ゐられるやうになったのは論外)従つて、この言ひ方、言ひかへれば「お……になる」形式は、東京(或は江戸)の新しい言葉と見做さざるを得ない。とすれば「何と申うてお出でになった」といふ言ひ方はいかにもをかしいことになる。私は右のやうな見地から、この例に對する疑惑を持ち和泉流繪入狂言記の板本にあたって見たのである。

ところがそれには「何とおもふて御出でなした」となつて居り「御出でなした」の部分は「おいでなされた」とよむべきものと思はれる。

湯澤氏が何によられたかはわからないが、幸田成行氏「狂言全集」和泉流の部、國民文庫刊行會本等に「おいでになつた」とあるのは明らかに現代語の意識による、校訂者の讀みあやまりと思はれるのである。

それも、前述の如く狂言記が當時の京都の言葉を傳へてゐると見られることと、今日同地に「になる」がなく、「なさる」から出たと思はれる「(な)はる」がある事實とを思ひ合はせる時一層確實性があるやうに考へられる。

それならば、一體、時代はどこ迄さがるのであらうか、再び湯澤氏によると、同氏は前記「現代語法の諸相」の中に「江戸言葉と東京語」と題して、今泉氏と並んで執筆して居られるが、その中に

動詞を、助動詞の様に補助的に用ひることは、頗る盛で、殊に敬讓の意味を添へる場合に多い。その語は大抵今日の東京語と同じであるが、今日「見て頂く」「お讀みになる」のやうに用ひる「頂く、なる」は、まだ廣く行はれなかつた様である。けれども作物に全然現れないのではない、例へば次の如くである。觀音さまへ宜い縁を結ばして戴いたお禮やら……(春の若草、二二)

。あなたが他國をお誓めになつても……(室の梅、駿河客)

(同書五九・六〇頁)

と記して居られる。

ところで、右の「室の梅」(振鷲亭作、原名、新作室の梅)は天明九年の序を有し、寛政元年に刊行されたものであるから時代的

にいつてもかなり下って來るので「お……になる」形式が見えてゐても一應うなづけないことはないのであるが、やはりその後の中斷されてゐる點に疑ひを持って原本本（早大圖書館藏）に當つてみた所、これまた「（あなたが他國を）御ほめなされても」とあつて、「おほめなされても」と讀むべきことがわかつた。なほ、室の梅には、日本名著全集によると、

其節御調べになりし政宗の刀おためしになり度き旨……（首覽）
ゆふべの火事にたちのまゝにお成りになりましたが……（見舞）
貴公ばかりは義太夫がおすぎと見えて御残りになり、拙者も語る張合が御座る（義太夫）

成程御出になりましたが、まだ御歸りなされませぬ（燈籠見物）
ハテ茄子を御覽じろ、一番早く御賞翫にならう。（駿河客）
といふ例があるが、これらの「になる」の部分はいづれも原本に「しめ」といふやうな字體で書かれてあり、「被成」にあたるものである。「し」が「ヒ」つまり「被」字であることは、同じ「室の梅」の

それは耳より早く御聞せしめませ（針覺）
能ひ醫者を引付けてしとの頼み（同）

等の例からもわかる。前者の場合、「お聞かせになります」といふやうな言ひ方は考へられないので、他の例と同様な筆法であるに拘らず、ここは正しく「御聞かせなされませ」と翻刻してある。（後者が「下され」であることは論ずるにも及ぶまい）さう言へば、「御賞翫にならう」なども随分變な言ひ方であるのだが……。

又、「になる」は普通、「あの世で狐すまますか」（狩人）におけ

る如く書いてゐる所からも、右の「し」が「に」でないことは言へるし、その他當時の多くの板本と比較してみても、「しめ」を「なされ」と讀むべきことは全く疑ひのないことを知るのである。（同じやうなことは前記狂言記の例についても言へよう）
では、「お……になる」形式は實際いつ頃から始まり、いかにして一般化して行つたのであらうか。私はこの問題に關する限り指針を失つてしまつたわけである。そこで、私は以下に私の狭い涉獵によつて得られた結果を報告してみたいと思ふ。

三

右に見て來た所からして、「お……になる」形式の今日と同様な例は、少くとも口語に關する限り、江戸時代も明治を去る餘り遠からぬ頃になつて現れることが豫想せられるのであるが、事實はどうか。私が今迄に氣のついた所では次の例あたりが極めて古いもののやうに思はれる。

※(1)イヤモ御腹立は御尤。今更何と申さうやうもござりませんが

。その理合をお訴へに。成ましては實に難義。（閑情未摘花、四編上）

※(2)しかし此御身上で一個ぐらひな女を別に被成お置遊ばしたからとて何程おいたみに、成ますものか（春色連理梅、初篇上）

(3)アノ今晚から、横濱町の若旦那様が房二郎をいふ、此家へいらッしやり限りになさつて、貴女のお部屋へ、御一所にお住居になりますよ（同、初篇下）

未摘花・四編は天保十二年刊、連理の梅は初篇から三篇迄が嘉永

五年に刊行されてゐるといふからこれ等の例は明治を溯ること僅か二十年前後のものである。

なほ、江戸末期に見える例を求めると、いづれも右の例より時代の下るものであるが、次のやうなものを擧げることができる。

(4) 遠からず米町へお歸りになりましたら……どうぞ戴しくお叱りなすッて流石貴君の席程と譽らるゝやうに、お育なされて下さいまし (春色戀廻染分解、二篇中、萬延元年刊)

(5) 様様……其の御様子では遠からず、御全快になりませう。(同四篇中、文久二年刊)

(6) 此の上彦三様がお上りになるやらならぬやら。若しお上りになつた上、彼様な者は否だと被仰つて、其の時物を思ふより、逢ひ見ぬ先に焦れて死に、可哀さうだと言はれたい。(同右)

(7) もう十日経つか經たぬ中には、彦三様がお着きになりませうから、夫れ迄何でも彼でも御全快遊ばすやうに、其の積りで氣を引立つてお藥を召し上りまし (同右)

(8) 彦兵衛様や俺なんぞが色々御勧め申して、漸々御上りになるやうになつたのだから、十のものなら七つ迄、御婚禮はむづかしからう。(同右)

(9) いづれ彦三様がお着きになつたら、其の上で亦能く相談しよう。(同右)

(10) 其處は諸合。其の刻限迄には屹度、お宅へお歸りになる様にいたします。(春色玉環、初篇上、明治元年刊、但し完成は安政初年)

(11) 雖て其のお子が莖爾々々と、笑ふ時分には無相違、御歸參に

なります様、三十郎と忠兵衛が、命に代へてもお託をいたします。(同、初篇下)

(12) 何だ彼だと意地悪を言つて、梅屋敷限りでお上りに、なると間もなく今度の御大病。(同、三篇上、明治二年刊、但し、完成は同じく安政初年)

(13) トキニ三十郎さん、お嬢様の御病氣も夫れ程御案じには及びません。直に御全快になるお咒禁が御座ります (同、三篇下)

(14) 女連のことではあり、あちらこちらを見物して、左様急々にもお立には成ますまい。(鶯塚千代の初聲、三篇中、明治二年に四篇完結故それ以前のもの)

「右の例中※印あるものは原板本のまま。他は原本を見ることができなかつたので、やむを得ず人情本刊行會本によつた。(但し、この方の振假名は特殊のものを除き省略) なほ、刊行年代については、暉峻康隆氏・江戸文學辭典、新潮社・日本文學大辭典等を参照した。」

右の如く、「お……になる」形式は江戸時代も極めて末期に至ると日常の會話にも段々と用ゐられたやうである。もつとも、右の如く列擧すると、段々どころか随分多く用ゐられたやうにも見えるが、これ等の例は極めて多くの、又大部な作品の中からつとめて求めた結果やうやくにして得て來たものであり、總體的に言つて決して多いものではないのである。「未摘花」の如きは上にあげた例が唯一のものである。當時の言ひ方としてはやはり、「お……だ」及び「お……なさる」形式、即ち、「お出でだ」「お書きなさる」式の表現が主流をなして居り、特に前者は當時の特

色ある一つの言ひ方であつたと思はれる。(敬意から言へば勿論後者の方が高いが、更に敬つては「遊ばせ」言葉も女によって用ゐられた。なほ、明治に入ると「お……だ」の勢力はずっと衰へ「お……なさる」が押出して来るやうだ。)

ところで、右の諸例から知られることは、この言ひ方が専ら人情本に現れて居るといふことである。そして、このことから「お……になる」形式は、當時の江戸町人、それも豪商と言はれるほどの人達の家庭、及びそれを圍る社會層において多く用ゐられたことが想像せられる。而も、それは主として女中や乳母、手代等の奉公人が主家の人のことについて言つてゐる例が斷然多い所から、敬意も高い改まつた言ひ方であつたことを知るのである。(例へば、前掲の例によるなら、女中が使つてゐるのが、(2)(3)(5)(7)の四つで、對象は(2)(3)が若主人、(5)が當家の娘、(7)はその戀人であり、乳母の例は(4)で、對象はそれぞれ當家の女主人及び娘になつてゐる。更に、手代は(8)(9)(10)で、これはいづれも若主人を對象としたものである。なほ、残つた例では、(1)が出入の職人の叔父から當家の若主人の叔父、(4)が妻から夫、(11)が支配人から若主人(11)が藝者の母親から武士に對してといふことになつてゐる。)

かくて、「お……になる」形式は、先づ、江戸末期におこつたと言つてよいであらう。では、それはいかなる過程を経て、今日の如き尊敬表現の代表形式となつたのであらうか。

四

思ふに言語の變遷といふものは、餘程特別な事情にでも左右さ

れない限り漸進的なものたるを免れない。

従つて、この形式においても、その一般化は徐々に進められたものと考へられるが、事實、明治も初期頃ではまだまだ江戸末期の狀態と大差なかつたやうである。それは當時の色々の文獻から知られるのであるが、例へば明治も十年頃に出て居る所謂實錄物の類を見てもその用例は極めて少なく、一つの作品の中に出て来る數も大抵二三に過ぎない。新聞記事などにおいても亦然りである。

ところが、それが二十年頃になると、さすがに小説などにはかなり多く現れて来る。例へば、末廣鐵錫の「雪中梅」、これは十九年の作であるが、その中には次のやうに今日と全く同じやうな言ひ方が、あちこちに見られる。

ソシテ先日河岸さんが御尋ねになりまして新聞は自分が引受け正誤を出さして遣ると大層親切らしい御話のありました跡で浮氣なとか御身持が悪いとか大層貴君の讒訴がしましたソシテ今朝も御出になつて貴君が昨夜新橋の梅吉と云ふ舊い御馴染をお呼びになり御連中を先きへ歸して獨り御宿りになりましたと問はず語りに饒舌で御歸りになりましたが何も河岸さんは利口で手に合はぬ御人で御座います

(明治大正文學全集 第二卷、七二頁、振假名省略)

これは、お春といふ築地の英語女學校に通ふインテリ女性(當時は周知のごとく、女學校に行くだけでも相當のインテリであつた)が、國野といふ愛國の士に對して話して居る言葉であるが、そのお春や國野、國野の友人、元、侍の出で商をしてゐるお春の伯父、

女中等、色々の人の口からこのやうな言ひ方が聞かれる。従つて全體のパーセンテージから言へば、まだ「お……なさる」式の言ひ方の方がかなり優勢ではあるとしても（そして、「お……だ」形式もまだ消えてしまつては居ないが）この邊に「お……になる」形式一般化の一段落を認めてもよいやうである。

ただ、併し、注意すべきことは、この「雪中梅」と相前後して現れた小説、即ち一年前に出た坪内逍遙の「當世書生氣質」にはこの形式がほんの数へる程しか現れず、一年後の二十年から二十二年にかけて出された、二葉亭四迷の「浮雲」に至つてはそれが全然見えず、専ら「お……なさる」（そして、「お……だ」も）が用ゐられて居るといふ事實の存することである。逍遙はともかく、二葉亭の如き言文一致體の先覺者の作品に右の事實あることは大いに考へさせられるところである。

思ふに二人とも一方には外國文學の紹介者であり、新しい文學の生みの親でありながら、他方にはやはり、江戸戯作者的氣質を脱し切れず、言葉もその影響を受ける所大であつたのだらうか。そして、さういふものに煩はされず、獨自の政治小説なるものを作りあげた鐵腸が、却つて當時の言葉を活寫し得たのではなからうか。或は又、作者の生立ちとか、描かれた對象、即ちその言葉を用ゐる社會層の相違とかいふことも問題にはならう。併し、生立ちの面からする考察は非常に困難であり、つづけば複雑となるであらうが、少くとも表面的な事柄からは特に前述の如き相違をもたすべき原因は考へられない。これに關聯して方言の影響なども考へるべきだらうが、鐵腸が一番年老いてから東京に出て來

てゐることを思へばこの點から説くこともむづかしい。又、描かれた社會も、それぞれ國土（雪中梅）、學生（書生氣質）、官吏（浮雲）と一應當時のインテリ階級を代表する者を中心とした世界であり、その間に非常な相違があるとは思はれない。（勿論それそれに特色ある言ひ方はあるけれど）とすれば、やはり、第一に擧げたやうな點が大きな理由の一つになつたのではなからうか。

さて、理由はとにかくとして、二十年前後の實情は右のやうであつた（註一）それが更に十年を下つて三十年頃に至ると、多情多恨、金色夜叉、不如歸等、いづれを見てもかなり多くの形式が現れて來る。特に注意すべきは、同じ四迷の作品でも「浮雲」に全然なかつたこの形式が「浮草」（三十年）には所々に見られるといふことである。これは、たとへ作者は同じでも、言葉の時代的變遷が當然作品の中に反映された結果にはかならないと考へる。

なほ、若松賤子譯の小公子（三十年刊）、これは今日のすべての童話に見られるやうに、子供に話しかける、やさしい文體で書かれて居るので、「お……になる」形式は多くてもよささうなのに、「お……なさる」の方が斷然多い。ただ、この作品中には、普通なら「ありませんでした」といふべき所を（それは當時の他の作品に對照しても言へるのだが）「ありませんかった」といふやうな言ひ方がなされて居り、これは作者獨特の言ひ様とも思はれるので、或は同じやうな理由から「お……なさる」形式も殊更多く出て來るのではないかと考へられる。

ところが、更に又下つて四十年前後に至ると、俄然「お……になる」形式は優勢となり、むしろ「お……なさる」形式を凌駕す

るかと思はれる位になる。この傾向は當時の多くの作品を通じて共通の現象であるが、特に漱石の作品、眞美人草や、三四郎等にはそれが顯著であり、そこに見られる會話は、敬語の面に限らずすべて今日のものと極めて近く居る。かくて、大正期に入つては「お……になる」形式も益々現代に近づき、そのまま續いて今日に至つたものと見られる。

従つて、私は明治四十年頃を以て、この形式の發展史上における第二の大きな段階と見做したい。(註二)

以上は、大體小説類を手掛かりとして得た結果であり、私はこれを以て生きた言語、口語の大勢を推定して差支へないと思へる。

ただ併し、ここに注目すべき一書がある。それは明治十三年沖繩縣廳學務課編する所の「沖繩對話」なる一書で、この本に出て来る「お……なさる」と「お……になる」とを比較すると、前者の三十三例に對し、後者は四十一例もあつて、むしろ「お……になる」形式の優勢なのに驚くのである。(但し、命令形は「お……なさる」の方にのみあつて、「お……になる」の方には過去にも現在にも存しないので例の中に數へることを省略した。)

この事實はいかに解すべきであらうか。それを考へるには先づこの書の性質を知らなければならないが、これは沖繩縣人に日本の標準語を教へる爲に作られたものであり、沖繩縣置縣(明治十二年)後數年間は沖繩縣の各小學校で日本語會話の教科書として使用されたものと言はれる。(琉球語便覽)(伊波普猷氏監修、大正五年九月糖業研究會出版部編)凡例参照)

ところで、その内容は如何。

○今日ハ、誠ニ、長閑ナ、天氣デ、ゴザリマス(〇)左様デゴザリマス、好キ、天氣ニ、ナリマシタ〇アレヘ、見ヘマス、ハ、最早、霞ガ、カカリテハ、ヨリマセヌカ(〇)成程、皆、霞ヲ帶ビマシタ
カスミヲカクトヤビシ

(上卷第一頁冒頭の全文、……線筆者)

右の一例によつても大凡は知られようが、この書には全體を通して……線部の如き文語がかなり混入して居り、それから推しても一般に非常にかどばつた言ひ方であることが知られる。又、敬語の面からすると、全體に極めて丁寧な物言ひであるといふことができる。そして、それは恐らく内地人と話す場合に禮を失しな

いが爲であつたと思はれる。

然るに敬語といふものは、新しいものほど敬意の高いことはいふ迄もない。(それは一つの言葉が使ひふるされて敬意が感じられなくなると、その代りに異なつた新しい表現を求めて、より高い敬意を表さうとするからだ。それ故に、新しいものほどとは置きかへられる前の言葉に對して言はれるものであること論をまたない。)従つて、この場合も、當時としてはまだ新しく、敬意の十分に高かつた「お……になる」形式の方が特に標準語的見地からも、より多く取入れられたものと考へられる。そして一般の會話においては、やはり文學作品に見られるやうな傾向が主流をなして居たのではないかと思ふのである。

なほ、これに關聯して思ひ合はされることは、逍遙や四迷の初

期の作品にこの形式が殆ど見られないといふ前述の事實であるが、それはそこで述べたやうな理由のほかに、この形式が、當時としてはまだ新しく江戸ツ子のすっきりした言ひ方になって居なかつたことを嫌つた爲ではないかといふことも考へられる。ましてこの形式が、後に述べる如く、格式ばつた文章語と脈絡を有するものとすれば、一層さういふことも言へさうである。

五

以上、私は「お……になる」形式の變遷を客觀的に概觀したわけであるが、最後に、それなら、この形式はどういふ形から、又いかにして今日の形に迄展開したのか一言加へて稿を終へたいと思ふ。

さて、これを考へるには、この形式と最も性質の近い「御……あり」「御……なる」の兩形式を對比させてみるのが好都合である。

「御……あり」形式は、古くは平安朝の「御物語あり」などといふ表現から發して、新しくは、江戸の「お見やる」「おりやる」更に「お」を落した「行きやる」等に迄發展し、「御……なる」は、鎌倉の「御幸なる」等に端を發し、室町には「おしなる」「オッシャルの意」といふやうな言ひ方まで現れた。(これを湯澤幸吉郎氏は「オ……ナル」が佐變の動詞「シ」を挿んだものと説明して居られるが(室町時代の言語研究、一三九頁)恐らく、「仰せなる」の轉であらう。この場合、上に敬意の接頭辭はないが、「仰せ」は既に敬語であり、而も言「お」を含んでゐるから、口調のことも考へると、むしろない方が自然な位である。(これは

「仰せあり」↓「おしやる」の關係と比較しても言へよう。)それに、サ變の連用形を「お」と「なる」とで圍んだといふのはどうしてそれが「言ふ」の敬語になるか説明できないが、「仰せなる」ならその點無理がない。而も、その實例は前代の平家物語等に澤山見られるし、それから「おしなる」への音轉も不自然ではないと思はれる。とすれば、右の如く解してもまづ間違はなからう。

ところが、この兩者は、その發生期における形式をみると、それぞれ

(1)御+動詞性名詞+あり

(2)御+動詞性名詞+なる

となる。そこで、一方は或動作をなすことを、存在する、即ち「あり」といふ言ひ方を以てし、他は同じくそれが自然に成立つ(即ち「なる」といふ表現を以てするといふ違ひはあるけれど、共に動作の直敘を避け婉曲に表した所に敬意が生まれたものと思はれる。従つて、最初は「あり」も、「なる」もその上にある名詞について敘述する所の純然たる動詞であり、それが用ゐられるにつれて漸次形式化したものと考へられる。

而して、「お……になる」も、形式から言へば當然右二例に準ずるものであるし、「に」なる」といふ表現は、「あり」なる」とはまた異なるけれども、或動作狀態に立ちいたるといふこれまた直敘を避けた言ひ方が敬意表現となり得たと思はれる點を考へるとこれら三表現は本質的に共通性の多いものといふことができる。さうすれば、この形式でもその初期においては、「に」なる」は

助詞及び動詞、その上の語は名詞として、それぞれ本來の性格を持した形が求められてもよさうなものであるが、事實は前に述べた如く、「その理合をお訴へに。成ましては」とか、「何程おいたみに成ますものか」とか、或は、「御一所にお住居になりますよ」とかいふやうに、少くとも文學作品においては、殆ど今日と相近い言ひ方が早くから現れてゐるのである。もっとも、「おいたみになる」の場合は、「いたみ」が名詞、そして「なる」は本來の動詞として使用されてゐる。つまり、「そのことが苦痛になる」といふ意味なのだといふ風に見られないこともないが、他の二例の場合は、「訴へ」も「いたみ」も一方に純粹の名詞としてのものがありながら（特に「訴へ」の方はそれにつづく「に」の下に。點があつて「成ましては」と切れてゐるのに）この場合はどうしても、「お」及び「にになる」と合體して一つの尊敬表現となつてゐるものと考へざるを得ないし、これにつづく諸例においても、今日のものに相近い例が多いことを思ふ時、私の探索の不足を想定してもなほかつ、この形式は案外急速に一つの表現形式として完成したことが考へられるのである。

併しながら、結論は急がれてはならない。私は今迄、主として文學作品を手掛かりとして、この形式の變遷を辿り、それが生きた話し言葉として實生活上に用ゐられるやうになつたのは江戸時代も末期と推定したのである。

併し、物には順序がある。右の如き結果を生むにはやはり、それ相應の理由がなければならぬ。その下地となるべきものはどこかに必ず潜んでゐる筈である。

ところが、この形式の起原と見られるべきものに、古く「お夜になる」「お覺になる」があることは今泉博士の指摘された通りである。けれども、これはそこでも言つた如く、ほんの萌芽にすぎないものである。

従つて、私がここで言はうとして居るのは、これらと前述の「お訴へになる」以下の例との中間的なもの、言はば前者から後者への橋渡しともなるべきものがあつてもよいといふことなのである。而して、文學作品などの口語資料においては前述の如くこれを求めることができなかった。世三三ところが、ここに私の注目をひくものがある。それは次に見るやうな例である。

一、同年（筆者云天明元年）六月御藏御門出入札提居候運送方舟頭、御藏納米壹俵、手船江取入候一件、御勘定公事、御奉行所御吟味ニ相成候所、……………（業要集・上巻、未刊隨筆百種・第七卷・二三頁）

一、天明五巳四月六日御小間遣衆長谷川庄八郎殿……………支配人勘右衛門ニ手班爲負逃去候ニ付、北御番所曲淵甲斐守様江御訴申上、御吟味ニ相成、右相手庄八郎殿者揚屋江被遣、御同役淺五郎者御組合江御預ケニ相成（同右、一三三頁）
一、御藏番以前拾人、北ノ丸御藏より三人、雉子橋御藏より四人、鐵砲州御藏より六人、本所御藏出來之御小揚頭より兩人、御抱ニ相成、（同・中巻、一八一頁）

安永四年未年四月廿五日

入相書を以御尋もの取計評議之事

向後人相書を以御尋ニ相成候者最初親類村役人等尋申付置候

共人相害にて御尋之御觸出候ハ、尋差免候積り一座評議極ル

(徳川禁令考・後聚五帙・四七五頁)

一、搦を乗越立入不得物取

是ハ御免ニ成候例御座候得共前書箇條ニ見競候得ハ難成

(文化十三子年、御禮作御祝儀大赦之節よりの追加)

(同前・六帙・五〇四頁)

〔右諸例、いづれも傍線筆者〕

右の「業要集」は、扇谷定繼著、文政元年の作者の自序あり、それによれば、前著「札差事略」(文化末年に、享保以來の舊記をまとめて、札差の沿革を記したものを)を摘要したものであるといふから、その中に見える例は、どんなに時代を下げてみても文政元年以前であり、他の二例はそこに記した年代のものである。従つて、これ等の例は、まづ、時代的に言つて前述の橋渡しの用をなし得る位置にあるが、更に、次のやうな考察からそのことが指摘されるのである。

ここで問題になるのは、右の諸例中における傍線部の解釋如何といふことである。

まづ、業要集における例を見る。第一、二例の「御吟味ニ相成」とは、お上が吟味をなされたの意なのか、さうすれば、これは今日の敬語様式と全く同じことになる。それとも事件がお上の御吟味にかかったの意か、それなら「ニ相成」は「御」とは無關係になつて、たださうなるといふことを表して居るにすぎない。第二例の「御預ケニ相成」「第三例の「御抱ニ相成」は如何、やはり動作の主體をお上と見るなら今日と同じことになるし、さうで

なく、淺五郎なるものが「御預け」の處分を受け、十餘人の者が「御抱へ」の身分になつたとするなら「御預け」及び「御抱へ」は純然たる名詞、「ニ相成る」も同様純然たる助詞及び動詞となつて、全體で一つの敬語形式をなすものとはならない。禁令考における二つの例についてもほぼ同様のことが言へよう。(但し、この方の第一例は今日のものに近く第二例は違ひといふ感はある。)なほ、「明和四亥年八月山縣大貳御仕置被仰付候書付」といふのに見える「御吟味相成候」(改訂史籍集覽・第十六冊・三九九頁)式の文句は、他書にも澤山見え、これは前にあげた例などに比較してみても「に」を入れて讀むべきものと思はれるが、その他、「に」を書いても書かなくても、かういつた種類の文句は、武家の記録類(特に候文)などにはかなり古くから見られることをつけ加へておく。

そこで、結局、問題の山は主語をいかに見るかといふ點にかかつて來ると思ふ。

併し、これらの例は、

○左之通手鎖御預ケ等ニ相成者、後猶又度々御呼出シ有之御吟味之上、……………(業要集・上巻、未刊隨筆百種・七卷七六頁)

○軍記と申は唐津浪人水野軍記此者一件吟味に不相成以前病亡いたし京都に葬有之候處一件顯れ吟味に成候所……………(文政十三年、耶蘇教徒磔刑の際の申渡、改訂史籍集覽・第十六冊・四六三頁)

○此帶刀致候儀は御屋敷方御抱又は御家來に相成候節帶刀致し申候御抱に不相成者は浪人者にて……………(文政十年、相摸行

司家のお上、に對する奉答書、同前、五一七頁)

○退役之儀相願候へとも聞届に不相成候に付迎も聞濟に者相成聞敷と相察候得共……(天保十年、渡邊華山口書、同、四一八頁)

(右いづれも傍線筆者)

等における傍線部の言ひ方と對照してみた場合、いづれも「御」と呼應して全體で一つの尊敬表現をなして居るのではなく、具體的にある事柄狀態に立ちいたることを示したものであるといふことが言へる。

併しまた、「御品頂になる」が本來品頂される方を主體とした言ひ方であったのが、後にする方を主にした敬語表現に移った例や、受ける意味の「賜はる」が後に與へる方に變った例などと比較しても、右のやうな言ひ方から主格の移行によって一つの尊敬表現に轉じて行くことは十分に考へ得ることなのである。「註四」(さう言へば、「御……あり」形式も「御……なる」形式も、やや違つた角度からではあるが、やはり主格の移行が行はれて一つの樣式として完成したものである)。

ただ、これらは特殊な文章語における例である點、直ちに口語の「お……になる」と結びつけることは躊躇されるけれども、かかる言ひ方は直接間接に口語にも影響を及ぼしたであらうし、一方に古く「お夜になる」といふやうな言ひ方もあり、更に又、形式は違ふが、同じ「なる」を用ゐた「御……なる」もあつてみれば、「註五」これらが一體になつて遂には「お訴へになる」、「おいたみになる」等の言ひ方を生みだして行つたことは考へられないこ

とではない。

以上、「お……になる」形式がいかにして今日の如き形にまで完成されたかについて考察してみた。

結 語

上に述べて來た所によつて知られる通り、「お……になる」形式は一應、江戸時代末期に一つの尊敬表現の様式として完成された。併しそれはまだ一般的に用ゐられるには餘りに微弱な存在であつたやうである。けれども、それはまた同時に新しい言ひ方として魅力のあるものではあつたらう。

そこで、明治に入り、所謂新文化の開花と共にそれは段々一般の人々に好んで用ゐられるやうになつて行つた。そして明治二十年頃を境としてその使用率は急上昇を示し、更に三十年から四十年頃へと近づくに従ひ所謂江戸語と異なつた東京語の姿が完成されて來る(「註六」と同時にこの形式も、新しい標準語における動詞一般の敬稱形として大きく浮び來たり、その後益々一般化して今日に至つたものと思はれる)。

註一、四朝の講談速記がこの頃(即ち、明治十七年の「怪談牡丹燈籠」を筆頭に)つぎつぎと出されて居るが、そこにも「お……になる」形式は段々見られるやうである。

註二、文法書でも、松下大三郎氏が自ら口語文典の嚆矢と自負せられる「日本俗語文典」(明治三十四年刊)にはまだ「お……になる」形式はもれて居るが、さすがにこの頃になる

とこれを取上げて居るものが多い。(吉岡郷市・日本口語法
《明治三十九年》、大宮貫三・日語活法《同四十年》、三矢重
松・高等日本文法《同四十一年》、保科孝一・日本口語法《同
四十一年度早大講義録》等)

又、これは最近氣がついたのだが「舊旗下の一人」な
る人の「大奥秘記」といふもの(新燕石十種 第五卷所收。
話の筆記かと思はれる文體である。中に、ペルリ來航のこ
とを四十九年前といつて居るから明治三十五六年のものだ
といふことがわかる。)をみると、動詞の敬稱形には殆ど「お
……になる」のみが用ゐられて居り、全體の調子も今日と
ごく近いものになつて居る。次の短い一節からも大凡は知
ることができよう。

……といふ様な譯だから、御登城とはいひませんで「御
城へ御入りになる」といひました。夫に大手から御玄關
へは決して御入りなく、平川口御門から御風呂屋口とい
ふへ御上りになつて、全く奥へ御通りになつたんです、
(五〇四頁)

(傍線筆者、なほ、括弧内の部分は他の同様の箇所と
比較して「秘記」成立當時の言葉ではないかと思はれ
る。)

註三、口語資料としては問題があるが、時代的に中間に存する
「御湯殿の上の日記」には、

(文明十五年九月)

廿四日。大をりのまつむるまちとのよりまいる。いつも

のやうに御くはりになる。

(永祿二年十一月)

廿五日。山國よりのふくろみなへ女中へ御くはりにな
る。兩ふきやうへも一ふくろつゝたふ。

(永祿元年閏六月)

六日。いりゑとのより御のりまいる。めうしん寺より御
うりまいる。御かたの御所。おかの御所へまいる。女中

も御くはりになる。(下略)

等の例があり、これらの「御くはりになる」は、今日のそ
れと全く同じやうに見える。もしさうだとすれば、「お……
になる」形式は少くとも宮廷語に關する限り、既に室町期
に用ゐられて居たことになるが、

(文祿三年八月)

三日。……ひろはしとりつき。さかうくわん御くはりに
女中へなる。

といふ例の一方にあるのを以てすれば、この「なる」は「行
く」「来る」等の意の敬語であり、従つて右諸例中の「御く
はりになる」は、「御配りにおいでになる」の意ではない
かと思はれる。そして、事實この日記の中に見える「なる」
の大部分はその意味のものなのである。ただ、さうすると
主上自ら女官達に物を配りに行かれた表現になる點が疑は
しいが、最後の例が、「女中へ御くはりになる」の轉倒で
でもない限り、右の如く解しておくほかに仕方がないので
はないか。私は日記を隅々迄細かく見通しては居らず、従つて

はつきりと斷言はできかねるので、これは後日の問題としてなほ研究してみたい。大方の御意見もいただければ幸である。

註四、武家の公用文や、日記、誓狀等においても江戸末期になると、今日の「お……になる」形式と同然の例が極めて多くなつて居るのは注目すべきである。左にその一例をかかげよう。

若又事筋を分御論ニ相成候而も一度御許容之廉を以外夷承伏不仕候得は御殿山之儀は其儘是迄之通被仰付置右近傍之地勢小高キ處ニ於て一二ヶ所御見立ニ相成ミニストル館に倍し候崇様之物御取建ニ相成……此處より彼か居館へ打入候形勢を御しめしニ相成且二本榎邊より御殿山への通路を絶ち裏手田面之迂路一道を残し置候へは何となく平生彼か驕抗之氣を壓し非常之御要害可然奉存候

(文久二壬戌年六月松平阿波守建白書、徳川禁令考第一、帙・三八四頁)

註五、「御……なる」は、「御寝なる」等の特殊な語に面影をとどめただけで大體鎌倉におこり室町に終つたといひ得る短命さであつたが、これは「なる」といふ語の性質にもよるのではなからうか。即ち、この語は形容詞や、形容動詞をうける場合は別として、體言につづく場合は「に」や「と」を伴つて用ゐられるのが普通である。それ故に、「御幸なる」や、「御感なる」等の固苦しい漢語的な言ひ方には用ゐられ得たが、純粹の大和言葉の場合には用ゐられ難く、

より安定感のある「になる」の方に席を譲り、自らはむしろ「お……になる」形式の登場をうながしつつ姿を沒して行つたものと思はれる。

六、中村通夫氏はその著「東京語の性格」中の「明治初年の東京語」と題する所で、東京語の完成を明治三十年臺として居られる。(同書五八・九頁参照)

〔附記〕

本稿をなすに當つては、特に、湯澤、今泉兩氏の御勞作に導かれる所が少くなかつたが、それだけに却つて兩氏に對しては後輩として失禮の言辭もないではなかつたかと思ふ。併し、私としては、眞實を求めたいといふ氣持以外に他意あるものではないのでこの點諒承していただければ幸である。一言添へて感謝とお詫びの意を表し、併せて大方の御叱正を仰ぐ次第である。

(一九五〇年四月一五日脱稿)